

4) マサキ=柾

マサキはニシキギ科の常緑低木で、各地の海岸付近によく生え、砂除けや風除け、また生け垣などにも用いられている。通常は陽当たりの良い場所に多いものの、疎林中のかなりの日陰でも成育し、しばしば『二次林』を構成することも多い。二次林とは伐採や自然災害などで、森林が破壊された後、森林中に残った種子や植物が成長して、新たに作る林のことで、日本ではまずススキが伸びて、この中から高山帯ではシラカバなどの日照を好む樹木が、平地ではこのマサキやリョウブ、カマツカ、ガマズミなどが枝を張ってきて日陰を作り、やがてススキが減少して、代わりに様々な下草や、樹陰性のヤブコウジなどの灌木類に変化してゆくことが多い。さてそのマサキの高さは 3m ほどで幹はよく分枝して横に広がる。葉は長さが 3~8cm ほど、肉厚の楕円形で鈍鋸歯があり対生する。6 月ごろ葉腋に集散花序を出して淡い緑白色の 4 枚の花弁からなる小花を開く。果実は扁球形で、熟すると 3~4 裂して、ニシキギ科独特の紅色の種子を現わす。和名の由来は「マサアオキ」(真青木)が訛ったものとも、挿し木で活着することから、「芽挿し木」が転じたものとする説もある。別称としてはアオノキ、ウシコロシ、トコナツなどとも言われるが、ウシコロシはカマツカ(06-01-19 カマツカの項参照)の別称でもあり、用途等に共通するところがあったのだろう。学名は『*Euonymus japonicus*』で、属名はギリシャ神話の神名であり、良い評判という意味である。イギリスでは『evergreen spindle tree』と呼ばれており、轆轤(ロクロ)の材に用いられたため、このように呼ばれたのだろう(02-03-08 エゴの木参照)。また単に『spindle tree』といえはマユミ(06-02-06)のことである。

平安時代の『新古今和歌集』には源俊頼の歌として以下の一句がある。

日暮るれば逢う人もなしまさき散る 峰の嵐の音ばかりして

この「まさき散る」は、秋の静かな山里にマサキの葉が散っている情景を描写したものでしょう。峰の嵐は秋風がそろそろ木枯らしに変わって行く季節を表現したものである。しかし水を差すようで恐縮だが、周囲の状況からこのマサキは他の木とする説も多い。その理由は、マサキは常緑低木であること。マサキは美しい果実と、葉が密に繁るため生垣に用いられる木で、この周辺状況とはやや不釣り合いなためである。

マサキの葉には斑の入るものもある。黄金色の斑が入るものを金マサキ、白い斑が入るものを銀マサキ、葉が覆輪状に白い斑で覆われるものを覆輪マサキといい、新緑の頃は一層美しい。また葉の一回り小さいものにヒメマサキがある。刈り込んでもよく新芽を吹き、挿し木でよく根づく。ただ暖地では特に病害虫に対する注意が必要で、5~6 月ごろ湿度が高くなってくると、ウドンコ病が発生する。またシャクトリムシの仲間黒褐色の『ユウマダラエダシャク』や、カイガラムシの仲間『ツノロウムシ』、それにハマキムシの仲間も発生してくる。これは通風が悪いのが原因で、懐枝を払って風通に心がけ、殺菌剤と殺虫剤の混合剤で消毒するとよい。



マサキは生垣などによく用いられる木で、成長も早く刈り込みにもよく耐え、半日陰でもよく育つ。葉に黄色の斑の入る種もあって、春の芽出し時は特に美しい(埼玉県深谷市)。



マサキの果実、ニシキギ科のため、仮種皮に包まれた果実をつける(長野県軽井沢町)。 [目次に戻る](#)